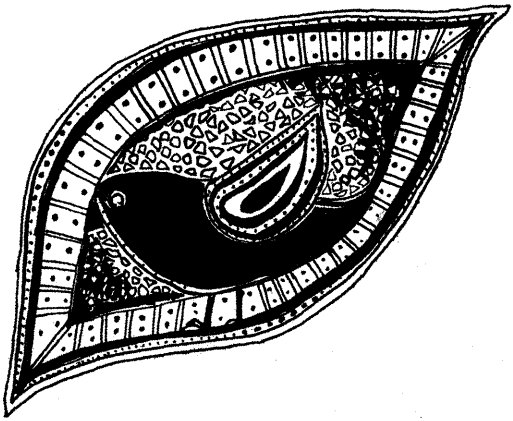
〝クラス〟の先生になって

はるにれの会
川上　美子



〝クラスの先生になる〟これは、私の長い間の夢でした。学校を卒業してから、幼稚園や養護学校、また今の保育園で働かせていただきました。しかしこれまでは複数担任の補助であったり、フリーの先生でした。今年、やっと念願のクラスの先生になれました。二歳と五歳の私の子どもを、同じ保育園で見ていただきながら、私は

別のクラスの担任になりました。もっとも、一時間半程（午睡とその後の時間）抜けさせてもらい、その間は主任先生に補ってもらっています。四月にスタートする前は、ほんとうに私に出来るのかしらと不安もありました。責任の重い仕事をやりとげることができるだろうか、また家の仕事や家族の世話もうまくやりこなすことができるだろうかと心配でした。

今はもう五月です。子どもとの生活も一か月が過ぎました。夢中に過ごした一か月ですが、毎日は、ひとりひとりの子どもとの生活（体験）の積み重ねです。保育園は時間が長いのです。私は朝八時半に来て、帰りは掃除と反省会が済むと六時半近くになります。そして保育日誌や記録つけ、教材研究や翌日の保育準備は家に持ち帰ることになります。今、連休を迎え、やっとゆっくり子どものことや、私の保育をふりかえる余裕が得られました。この一か月間の確かな手応えを味わいなおしたいと思います。

一、四月一日

私のクラス（ファミリー）は、五歳児六名、四歳児十二名の縦割クラスです。四月一日の第一日目。子どもはそのままを私に投げ出してくれているようで、クラスの先生の実感をさっそく味わいました。昨年度はフリーの先生でしたが、やはり違います。私は、この子ども達と別れる時どんな思いになるのだろうか、耐えられるだろうかと、一日目にしてそんな取り越し苦労をしました。

二、四月八日

(i) 前日の夕方、私の二歳の子どもが足を怪我し、夜中にひどく痛がり、この朝、私は病院へ連れて行きました。十時までかかり、朝の子どもの受け入れと遊びを、主任先生にしていただきました。私はやむをえないと思いつつも、クラスの子ども達に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。お集まりが終わった後で、私はクラスの子ども達を集めました。ところが四歳女児のMとEがいません。私は「MちゃんとEちゃんを探しに行こう」と言

うと、うれしいことに、私の促しで電車のようにみんなが連なり、探しに行ってくれました。二人は二歳児クラスの先生の机の下にもぐっていました。私「見ーつけた」と言う。ところが、他の子ども達が「どうしてここにいるの」「りす組さんになっちゃうよ」と、二人に強い口調で言うので、二人はますます出て来れなくなりました。私「今日も楽しいもの持って来たの。Eちゃんも貼って」と誘う。やっとのことで二人は部屋に入ってくれました。何日か前から、毎日、壁面に木を作り、その木に名前のついた花や果物を、座席シールのように貼る活動をしていました。この日、私は、小さなりんごを色画用紙で作り、Eにも木に貼るように、名前のついたりんごを渡しました。ところがEは、そのりんごをねじって破ってしまいました。私はあまりのことに、思わず泣き出してしまいました。「せっかく先生が作ったのに」Eはなんとも言えないきつい目をして、顔をそらしてしまいました。

(ii) 昼食の時間になり、子ども達は食事の準備にお遊戯室に行きました。ところがMとEは自分の部屋のままごとコーナーで遊んでいて、何回、食事に誘っても「食べない」と言います。私は主任先生に、午前中の出来事と何やら話された後、二人は先生の促しで私の所へやってきました。Eは「恥ずかしかったの」と言いました。私は思わずEを抱きしめ、何か言ったようです。しかし言葉は不要です。私は、Eが自分の気持ちを素直に表わしてくれたことでもう充分でした。後で主任先生は、私が作ったりんごを破った自分の行動を恥ずかしく思ったのだと言われました。私はEの心の多感さ、繊細さに〝こわいな〟と思いました。Mも次に私の所へ来て、「おなかすいてるの」とほんとうの気持を言ってくれました。私「そうだったの」と抱き上げ、三人で食事の準備に行きました。

(iii) 五歳男児のHとTも、ファミリーで集まる時と、食事の時にいません。私が探すと、お遊戯室の押し入れの中に隠れていました。私が探し出すと、喜んで出て来

ました。

私はお昼寝の前、かくれんぼを提案しました。私が鬼になり、子ども達がかくれます。押し入れに隠れる子どももいますが、お友だちのふとんに隠れます。私は頭や足や手に触って、その子どもが誰かを当てます。当たった時もはずれた時も、先生にひとりずつ触わられ、みつけられることはうれしいようです。みんなは大喜びします。

子どもの心を摑むことは、ほんとうにむずかしいとこの日、思いました。子どもがみんなとはずれたことをしたり、隠れることが、私の愛情を求めていることであったりします。お昼寝前のかくれんぼをみんなが喜ぶのも、ひとりひとりだれもが自分をつかまえてほしいという欲求の現われです。この日の午後のおやつの後、私はお遊戯室の片付けをして部屋にもどってみると、何も言わなかったのに子ども達がいすを並べて、連絡ノートを配ろうとしていました。これまで私がしてきたことを自分達でやり出しました。先生とひとりひとりのつながりが、またファミリーのつながりやまとまりになっていくのでしょう。

Eのこの日の出来事は、私には忘れられないものとなるでしょう。その後のEは私に対してつっぱった表情を見せなくなり、むしろ私の肩を持った発言をするようになりました。

数日後のこと、午睡の時に、私がEの隣の子どもを寝かせつけていると、Eがそっと私の手に自分の指を当てます。私はEに背を向けているのですが、そのままそっとEの指を握りました。Eも私も、正面から向き合うには抵抗がありました。しばらくして私ははじめてEの方を向くと静かに寝入っていました。

Eと私のつながりは深まっていき、遊びの中でも私でなければと要求してきます。また私が用事でEよりも早く帰る時、グローブジャングルのてっぺんから大きな声で、私の姿が見えなくなるまで「さよなら」と言い続けていました。

三、四月二十一日

私は、年齢別活動の日は四歳児を担当しています。この日は私のファミリーの四歳児を活動する日です。リズム遊びをみんなでした後、外遊びをしました。食事時間になり、片付けをしてお遊戯室へ行くようにと子ども達に言いました。ところが四歳男児三人は、何回言っても遊びを切り上げることができず遊び続けています。みんなはもう食事の準備がすっかり出来ているのに、まだ来ません。私は業を煮やし、「そんなに遊んでいたかったらお昼、食べなくてもいいわ」と言い、部屋へ入りました。他の先生方とも、どうなるか様子をみましょうということになり、それ以上何も言わず、三人の好きなようにさせることにしました。三人は何ということもなさそうに、楽しそうに遊び続けていました。さすがに二時半になると、疲れがでてきた子どももいました。私は外に出て、「先生にお話がある人は言いに来て」と声をかけました。するとひとりがやって来ました。私はその子どもをひざに乗せました。その子どもは、「言うことを聞かないでごめんなさい」と私に言いました。もうひとりは、自分たちの使ったおもちゃをしきりに片付けています。片付けないと中に入れないと思っているようです。その子どもは気持ちのやさしい子どもですが、気が弱いところがあって、他児に引っぱられてしまうのです。あとのひとりは、私が声をかけなかったらずっと遊び続けていたかもしれません。私の言ったことなどへっちゃらです。私の子どもの場合は「好きにしなさい」「かってにしなさい」と怒って言うと、かえって自分の思い通りにしないものです。ところがこの三人には、これが通用しないのです。

今、私の言動を思いかえすと、好ましくない対応であったと反省します。四歳児の活動がもっと充実し満足できていたら、遊びの切り上げも早かったかもしれない。また、ただ遠くから「お食事ですよ、早くいらっしゃい」と声をかけるのではなく、子ども達の方へ出向き、その遊びのおもしろさを感じてあげられたら、こんなにもこじれなかったはずです。また、私の「そんなに遊ん

でいたかったら、お昼、食べなくてもいいわ」という発言を、子ども達はそのまま受け取り、食事を食べさせてもらえないと思ったようなのです。私の思いと子どもの気持ちもすれ違っています。

この三人のように、次の行動へ移る時、なかなか切り上げられない子どもがいます。私はつい、「早くして」「待ってるわ」と言いますが、これ位ではだめです。こんなことが一日のうち何回もあります。その度に、せかしたり、期待を持たせるような発言を考えて誘ったりもしますが、毎回だとうんざりします。ある子どもは、たまに最後にならずに食事の準備ができると、「早く食べようよ」と催促します。いつもお友だちを待たせている人が身勝手です。ところがこうした子ども達が、「川上先生と食べようと思ってずっと待っていたんだ」とか、「先生に作ってあげた」とプレゼントをしてくれたりします。

身勝手といえば、友だちをボンボンとパンチをするくせに、人からやられると泣きべそをかいて私に訴えに来ます。しかし、こんなこともあります。ある子どもが泣いていて、泣かせた子どもがわかると、「許せない」とその子どもをたたきに行こうとします。その子どもなりの訳があるのでしょうが、自分本位、自分勝手と思える行動をとる子どもが、どのようにして相手のことも考えてあげられるようになるか、今後の成長の過程を楽しみにしています。

四、四月二十七日

私のファミリーの四歳児十一名で、こいのぼりの製作をしようと思いました。部屋に集まるように声をかけ、部屋の中央に一畳のカーペットを置いておきました。すると二、三人の子どもがカーペットをとびこえる遊びをし始めました。私もとんでみました。それから少しずつカーペットの長さを長くして、みんなで交互にとぶことになりました。私の促しでみんな靴下を脱いで裸足になりました。みんなで楽しんでいるうちに、遅れて入った子どもも加わりました。その後、床に三色のビニールテ

ープを貼り、色鬼のような遊びになりました。次に私は、白い紙を床の上に散らし、ピアノが止まったら、紙の上にはみ出さないように乗るゲームをしました。楽しんだ後、子どもの足型をその紙にえんぴつでとる活動をしました。二、三人の子どもは出来ましたが、その他の子ども達は私が書きました。子どもはくすぐったそうでした。次にその足型をクレヨンで塗るように言いました。子ども達はそれぞれに塗り始めました。私は、「みんなの足でできたこいのぼりを作るのよ」と話しました。前日、別のファミリーの四歳児が作ったこいのぼりを見せました。すると、子ども達の中から、ワーというどよめきがありました。塗り終えた子どもにははさみで切るように言いました。ところが女児Eは、いい加減な切り方をしています。Eはうまく切れるはずだのに、いやいややっている様子です。女児Mも途中で止めてしまう。私は理由を聞くけれど、「明日する」と言います。MとEは絵は描きたそうなので、私は余った紙を渡しました。するとEとMは、その紙を半分にして細長くし、きれいな色で幾何学的な模様に塗り分けました。

この日の設定活動で、私はいくつかの点を教えられました。私は設定活動をする経験が乏しい。子どもが楽しく意欲的に取りくみ、また子どもの満足感を与える活動にするにはどうしたらよいか、子どもに向う前、いろいろと頭を悩ます。しかし、今日の何げなく置いておいたカーペットを、子ども達がとぶという動きから、次から次へと思いがけず遊びが展開していきました。ゲームも盛り上がり、最後に紙の上に裸足でのる活動も無理なくできました。導入はうまくいったようです。設定活動も、子どものその時の気持をくみとり、方向を作っていかなければ、子どもの意欲は生まれてきません。先生の目的にただ子どもを引っぱっていこうとしても、子どもはやらされている思いで、自発的な活動にはなりません。さて、私がこいのぼりの出来上がりを見せた後、MとEの行動が急変しました。私はその時なぜかわかりませんでした。しかしその後、二人が楽しく描いた絵を見てやっとわかりました。子ども達の足型でできたこいの

ぼりは、素朴で力強く、私にはすばらしく思えました。ところがMとEにとってのこいのぼりは、きれいな色で塗られた、ひとりで作るこいのぼりだったのです。二人のこいのぼりのイメージは私の思いとかけ離れていて、作る意欲がすっかりなくなってしまったのです。MとEは、「わりばしと糸をちょうだい」といい、私も用意しました。翌日は、切った足型を、踵の部分だけのり付けして鱗とし、全体をえのぐでぬる活動を予定していました。翌日、二人はこの活動に参加するのか、それとも自分のこいのぼり作りをさせた方がいいのか考えました。EとMは自分のこいのぼりを作るという要求が満たされたからでしょうか、翌日、Aは前日の続きで足型に色をぬり始めました。私の方も、ただ足型をはるだけでは楽しくないと思い、みんなの足型に数字をふり、ゲーム遊びをしながらはって行きました。EもMも参加し、こいのぼりは完成しました。私はほっとしました。ひとりひとりの気持をくみながら、全体で仕上げていくことのむずかしさを感じました。部屋に二メートル近くの大きなこいのぼりを飾りました。子ども達は「私の足はこれ」とお友だちと話をしています。

〝クラスの先生〟思っていた以上に手ごたえがありました。生(なま)の子どもと私との出会い、かかわり合い、ぶつかり合いです。私は子ども（人）とこんなに深い心の通い合いができることは、すばらしいことだと思います。時に、私の家の調子で〝うるさい!!〟とどなりたくなりますが。この一年、元気に楽しく明かるく子ども達とすごしたいと思っています。